

まちの歴史再発見

生田長江

近代日本を代表する翻訳家であり、評論家、思想家でもあった生田長江。しかし現在では、その存在を知る人は少なくなっています。郷土が生んだ、この偉大な文化人の足跡と業績、また研究者の声などについてご紹介します。

大正5年夏、本郷森川町（東京）の自宅裏庭にて（長江34歳、長女まり子4歳）

貝原で育った少年時代

生田長江(本名「弘治」)は明治15年(1882年)、父喜平治、母かつの三男として貝原に生まれました。

信心深い旧家に育った長江は、子供時代を「毎晩燈明を上げ、祭日毎に神酒を供えて合掌したり拍手をなしたりしながら無慮三四十箇処の仏壇や神棚を礼拝して回る父に、その燈明や神酒の手伝いをするのは、私達子供の順々に引き受けさせられた役目である」と回想しています。

明治28年(1895年)、日野郡高等小学校を卒業し、延暦寺(根雨)の松本大典和尚に漢学を教わったり、農業を手伝ったりしながら過ごしていた長江は、翌年12月、兄貞二郎の後を追って大阪へ行き、明治30年(1897年)5月に大阪桃山学院に入学しました。

17歳で上京、
上田敏らの教えを受ける

その後、明治32年(1899年)4月に上京、青山学院中学部へ入学、その後第一高

等学校を経て、同36年(1903年)に東京帝国大学(現東京大学)哲学科に入学し、詩人の上田敏、英国から帰国したばかりの夏目漱石らの教えを受けました。

明治39年(1906年)、「芸苑」4月号に「風葉論」を書いた時に上田敏から「長江」という新しいペンネームを与えられ、同年大学を卒業しました。

女性解放運動のきっかけをつくる

明治40年(1907年)、成美女学校の英語教師であった長江は、結婚して千駄ヶ谷の与謝野鉄幹・晶子夫妻の隣に移り住んだこともあり、晶子らとともに校内に「秀文学会」を作りました。その聴講者の中には、後に女性解放運動家となる平塚明(らいてう)がいました。

明治44年(1911年)からいてうは女性だけの文学誌『青鞥』を長江の勧めで創刊。この後の女性解放運動に大きな影響を与えました。らいてうが創刊号に寄せて書いた「原始、女性は太陽であった」

た」はあまりにも有名な言葉です。また「青鞥」とは、ヨーロッパで知的な女性たちがはいていた「青い靴下」にちなんで長江が名付けたものです。

翻訳家としても活躍

長江はまた、ドイツの哲学者、ニーチェの著作を翻訳したことも有名です。

学生時代から長江はニーチェに興味を持ち、明治44年(1911年)、ニーチェの『ツアラトウストラ』の翻訳を出版したのをはじめ、大正4年(1915年)から『ニ

イチェ全集』の翻訳に取り掛かり、以後15年をかけて完訳し、日本でのニーチェ研究の第一人者となりました。

その他、ダナンチオの『死の勝利』、ダンテの『神曲』などの翻訳を多く出版しています。

苦しみと戦いながら
執筆活動を続けた

大正6年(1917年)6月、妻の藤尾が病死したことをきっかけに創作を始めた長江は、同年8月に戯曲「円光」

を発表、その後も数々の評論、小説などを次々に発表していききました。

大正12年(1923年)9月、長江は関東大震災で被災、自宅をはじめ蔵書や日記、写真などほとんどを焼失してしまします。さらに長年の病氣も悪化、病床での執筆活動を余儀なくされました。

そんな苦しみの中、長江は仏教の救いに新しい悟りの道を開き、昭和3年(1928年)頃から、小説『釈尊伝』の準備に没頭します。

晩年の長江は失明し、原稿



町図書館所蔵の長江作品。「ニイチェ全集」をはじめ多くを閲覧できる。

も筆を持って自ら書くことができなくなっていました。それでもなお『釈尊伝』執筆に執念を燃やしつづけてきました。

昭和11年(1936年)1月11日、長江は54歳で死去、最後の創作となった『釈尊伝』は、ついに完結することはありませんでした。

長江の業績を伝える顕彰会

評論家、思想家、翻訳家、作家など、長江の多彩な文化活動の底にあったのは、「いかに生きるべきか」という命題でした。

その思想や業績を研究し、また後世に残そうと、長江の死から20年が経った昭和32年(1957年)、門弟だった佐藤春夫、伊福部隆彦らを顧問に迎え、郡内有志による「生田長江顕彰会」が発足し、長江作品の出版や講演会などの活動を行いました。

そして、昭和33年(1958年)、顕彰会発足の目的のひとつでもあった顕彰碑が、長江が少年時代に感化を受けた延暦寺の境内に建立され、長江の偉業を今に伝えていきます。